

佐賀新聞 2010(平成22)年2月27日(土) 県内文化欄 文化時評2010【美術】

県内文化

美術

野中 耕介

1月1日から開催された「近代との遭遇―世界を見る・日本を創(つく)る―」(佐賀城本丸歴史

館開館5周年記念特別

展、会場

県立美術

館)が、

「いとは選び」の日々

等々、好意的かつ熱い? 感想が多く寄せられた。しかし、毎日のトークは実際にやってみると、想像を超える苦行で、夕方には身も心も疲れ果て、力なく会場のソファに座り込んでしまうという毎日だった。

私の場合、お客さまを

しく、分かりやすく、かつ正しいことばで、展示のストーリーや個々の作品の魅力をお話ししなければならぬ。専門用語にまみれた日常をおくる私たち学芸員には、これは意外に難しいことなのである。

さらに今回は、洋画

などという失敗もあった。(長いトークは、喋る側より聞く側が大変なのである) 展覧会をひらくという仕事の本質は、「ことば」を「探し」「選ぶ」ことだと、今更ながらつくづく思う。「近代との遭遇」展に明け暮れたこの1

前にしてのお喋(しゃべ)り自体は苦にはならないのだが、問題はお客さまに「どのようなことばでお話する(お伝えする)か」である。お客さまの興味、関心、また知識の深さと幅は、当然ながら一人一人違う。そうした異なる前提、背景を持つ方々すべてに通じるように、できる限りやさ

(油絵)の技法、技術が展示のひとつの重要なポイントであったので、種々の洋画技法、それらの専門用語をどのよう

年、展覧会 図録の論考 からキャラ

今月14日をもって終了した。本紙に紹介されたように、会期の後半、私はほぼ毎日会場に立ち、第2部・近代洋画部門のキヤラリートーク(展示解説)をおこなった。これがなかなか好評だったようで、来館者の方々から「展示がよく分かる」「来てよかった」、あるいは「本当に感動しました」

かについて苦心した。ある時などあまりに丹念にお話ししすぎて、話が油絵の歴史にまでおよび、ふと気づくと長い時間が経(た)っていた、

リートークまで、とにかく「ことば」に苦勞し通しの毎日だった。とはいえ、展覧会は博物館、美術館、学芸員にとって、お客さまと直接触れ合うことのできる、最大にして最高の機会である。そこで私たちが得るものは、計り知れないほど大きいのだ。

(県立美術館学芸員)

文化時評

2010